

アーノルドとバラッドをめぐって

山中光義

I

仮に理論面において W. Wordsworth の “Preface to the Second Edition of the *Lyrical Ballads*” (1800) を、実践面において S. T. Coleridge の *The Rime of the Ancient Mariner* (1798) を頂点として、18 世紀から 19 世紀にわたって英詩は、所謂 “Ballad Revival” と呼ばれる一時期を画した。その間多くの詩人が、バラッドに対する持続的積極性の有無は別にしても、バラッドを試作し、所謂 “literary ballads” を残してきた。¹

それらのバラッド制作を刺激し、ひいては Romanticism 台頭の重要な要因と目されるのは、T. Percy の編纂になる *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) であった。² Wordsworth は、これによって英詩は復活したと宣言し、彼自身を含めて当代の詩人で *Reliques* に負うところ大としない者は一人もいないとまで明言している。³

このようにバラッドが英詩の大流の中に本格的に伍してくるのは 18 世紀、それも中葉以降であったとしても、それ以前に既にバラッドの持つ文学性に気付き、注目してきた詩人達がいたことは、英文学そのものの発展の為に決して無視しえない事実である。古くは *The Apologie for Poetrie* (1595) の中での Sir P.

¹ 参考までに A. H. Ehrenpreis 編集の *The Literary Ballad* (London: Edward Arnold, 1966) に収められている詩人達を列挙してみると、W. Hamilton of Bangour (1704-54)、D. Mallet (1705-65)、T. Tickell (1686-1740)、O. Goldsmith (1730-74)、T. Chatterton (1752-70)、Lady A. Lindsay (1750-1825)、W. Cowper (1731-1800)、W. J. Mickle (1735-88)、M. G. Lewis (1775-1818)、G. A. Bürger (1747-94)、S. T. Coleridge (1772-1834)、W. Wordsworth (1770-1850)、W. Blake (1757-1827)、T. Campbell (1777-1844)、Sir W. Scott (1771-1832)、J. Keats (1795-1821)、A. Tennyson (1809-92)、W. E. Aytoun (1813-65)、W. M. Thackeray (1811-63)、C. Kingsley (1819-75)、D. G. Rossetti (1828-82)、S. T. Dobell (1824-74)、W. Morris (1834-96)、G. Meredith (1828-1909)、A. C. Swinburne (1837-1909)、L. Carroll (1832-98)、C. S. Calverley (1831-84)、J. Davidson (1857-1909) らである(中で Bürger はドイツの詩人)。なおこの選集には J. Swift (1667-1745)、A. Pope (1688-1744)、R. Burns (1759-96)、更には T. Hardy (1840-1928)、W. B. Yeats (1865-1939)、W. H. Auden (1907-73) らは含まれていない。特に最後の二人はそれぞれに個有のバラッドの佳品を残していて、literary ballads の系譜の中では重要である。

² Cf. “Since the appearance of Percy’s collection, the Romantic ideal had crystallized round these themes and these rhythms, that are still pregnant, with the old-time vigour of the English genius.” [É. Legouis and L. Cazamian, *A History of English Literature* (London, J. M. Dent & Sons, 1971) 1008]

³ “Essay Supplementary to the Preface of 1815,” *The Poetical Works of William Wordsworth* IV, ed. W. Knight (Edinburgh: William Paterson, 1883) 352-53.

Sidney の言及が挙げられる。

“Certainly, I must confess my own barbarousness, I never heard the old song of Percy and Douglas that I found not my heart moved more than with a trumpet; and yet is it sung but by some blind crowder, with no rougher voice than rude style; which, being so evil appavelled in the dust and cobwebs of that uncivil age, what would it work, trimmed in the gorgeous eloquence of Pindar?”⁴

彼がここで “the old song of Percy and Douglas” といっているものが *The Battle of Otterbourne* をさすのか、それとも *The Hunting of the Cheviot (Chevy Chase)* をさすのかは本来不明であるが、その文学性等から恐らく後者であろうということは F. J. Child 以降いづれのバラッド編集者も意見が一致するところである。⁵ とにかく Sidney が、このイングランドとスコットランドの Percy / Douglas 両家の葛藤を題材とした古くからのバラッドに親しみ、深い感動を受けたことは事実である。

J. Addison によれば B. Jonson も *Chevy Chase* を愛し、彼の全ての作品の作者であるよりもこの一篇のバラッドの作者でありたかったと述べているそうであるが、⁶ Legouis をして *Chevy Chase*こそ Romanticism を誘発した詩であると言わせたのは、⁷ 当の Addison 自身の功績によるものであると言っても過言ではなからう。Sidney の遠慮気味の、多少後めたい感じの告白ぶりと異なって、Addison はこの詩の崇拜者であると公言して憚らず、*The Spectator* の第 70 号と 74 号(1711 年)の二度にわたって、いささか強過ぎるまでの調子で、Homer や Virgil に匹敵するほどの高度の文学性を指摘するのである。⁸ その力みぶりはともかく、バラッドの主題と表現の両面にわたって細かく注目し、*Aeneid* と比較していった彼の批評態度は、従来文字通り民衆のものとして正統派文学の背後に潜ってきたバラッドに向けられた初めての本格的視点であった。とりわけバラッドの普遍性に触れた次の文章は、約一世紀後の Wordsworth の *Preface* の基本的精神に明らかに先駆けるものであり、上の Legouis の言葉を再確認させるものである。

“Homer, Virgil, or Milton, so far as the language of their poems is understood, will please a reader of plain common sense, who could neither relish nor comprehend an epigram of Martial, or a poem of Cowley: so, on the contrary, an ordinary song or ballad that is the delight of the common people cannot

⁴ E. D. Jones, ed., *English Critical Essays: XVI-XVIII Centuries* (London: Oxford UP, 1952) 27.

⁵ Cf. F. J. Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads*, Vol. III (New York: Dover, 1965; originally published in 1882-98) 305; F. B. Gummere, ed., *Old English Ballads* (New York: Russell & Russell, 1967; first published in 1894) 325; M. Leach, ed., *The Ballad Book* (New York: A. S. Barnes, 1955) 446-47.

⁶ Jones 229.

⁷ Legouis and Cazamian 178.

⁸ *The Spectator* No. 85 でも Addison は別のバラッドを紹介して、その崇拜ぶりを披露している。

fail to please all such readers as are not unqualified for the entertainment by their affectation or ignorance; and the reason is plain, because the same paintings of nature which recommend it to the most ordinary reader will appear beautiful to the most refined.”⁹

もう一人、この小論の展開のために紹介しておきたい詩人は T. Gray である。1757年6月 W. Mason にあてた手紙の中で、前年上演されて非常な当りをとった J. Home の悲劇 *Douglas* のソースとなったバラッド *Child Maurice* のことで次のように述べている。

“I have got the old Scotch ballad on which Douglas was founded; it is divine.... Aristotle’s best rules are observed in it in a manner that shews the author never had heard of Aristotle. It begins in the fifth act of the play. You may read it two-thirds through without guessing what it is about; and yet, when you come to the end, it is impossible not to understand the whole story.”¹⁰

Cray がバラッドの特質を正確に把握していることがわかる。Aristotle が詩の中核として主張した Action と Unity Of Action の諸問題は、まざれもなくバラッドの基本的問題と関連し、状況説明を抜きに直接事件の核心に迫る語り口も、バラッド独特のものである。

Wordsworth の影響が如何に大であったかと告白することに吝でなかった M. Arnold が、以上概観した “Ballad Revival” の流れの中に位置しながら一篇のバラッドも書かず、彼の精力的な批評活動の中で殆んどバラッドを無視し続けたことは、一見奇異な感じを免れがたい。わづかに Homer 翻訳論と Wordsworth 論の中にバラッドに対する言及がみられるのみであるが、それもかなり一方的なバラッド否定の立場である。しかしながら彼の標榜する文学的立場を、Addison や Gray、そして何よりも Wordsworth とつき合せながら細かく観察してみると、あるいは Arnold は少々意識的にバラッドから逃れ、無視しようとしたのかも知れないという気がしてくるのである。

II

まづ Arnold のバラッドに対する否定的立場が唯一前面に出てきている “On Translating Homer” をとりあげて、いくつかの論点を整理してみたい。

実はこの評論は、1857年オックスフォード大学の詩学教授に就任した Arnold が、一つには詩の講義が少ないという不評に答えて、特別にもうけた連続講義¹¹

⁹ Jones 228-29.

¹⁰ E. Gosse, ed., *The Works of Thomas Gray* II (London: Macmillan, 1884) 316.

¹¹ 1860年11月3日、12月8日、61年1月26日。更に、この講義で直接攻撃の対象になった感のある F. W. Newman (J. H. Newman の弟で、ロンドン大学のラテン語教授) が反論のために *Homeric Translation in Theory and Practice: A Reply to Matthew Arnold* (London: Williams and Norgate, June 8, 1861) を出したため、それに答えて (“Last Words”) 同年11月30日に4度目の講義を行なった。なお Arnold / Newman 論争については B. Willey, *More Nineteenth Century Studies* (London: Chatto and Windus, 1963) 41-45 を参照。

であり、Homer 訳をバラッドで行なおうとする時代の雰囲気に対して、¹² Classicism の立場に立つ Arnold がその面目にかけて対決しようとした感じで、その力みぶりがむしろ Arnold の考えを生に出させていて面白い。この講義における彼の基本的な構え方と意気込みのほどは、次のような言葉に明らかである。

“This proposition that Homer’s poetry is *ballad-poetry*, analogous to the well-known ballad poetry of the English and other nations, has a certain small portion of truth in it, and at one time probably served a useful purpose, when it was employed to discredit the artificial and literary manner in which Pope and his school rendered Homer. But it has been so extravagantly over-used, the mistake which it was useful in combating has so entirely lost the public favour, that *it was now much more important to insist* on the large part of error contained in it, than to extol its small part of truth. *It is time to say plainly* that, whatever the admirers of our old ballads may think, the supreme form of epic poetry, the genuine Homeric mould, is not the form of the Ballad of Lord Bateman.”¹³ (The last two are my italics.)

Arnold の論点を便宜上区分すれば、詩の形式・文体に関する外的側面と、詩の精神(思想)に関する内的側面に分かれ、彼はこの両方の点でバラッドを否定する。

(1) 彼が詩の文体として主張するのは、所謂彼のいう “grand style” である。これは彼があらゆる詩を判断する時の基準であり、従ってまた、バラッドを否定する彼の立場の基準ともなるもので、彼の文学批評の鍵となる言葉である。彼はその言葉の定義を次のように試みる。

“The grand style arises in poetry, *when a noble nature, poetically gifted, treats with simplicity or with severity a serious subject.*”¹⁴

そして “grand style simple” の最高の詩人として Homer を、“grand style severe” の最高の詩人として Milton を、両者を兼ね備えた最高のものとして Dante を挙げる。前者は詩人の「卓越した能力」・「詩的才能」に関わって最高に崇高であり、後者は詩人の「偉大なる人格」・「高尚なる性質」に関わって最高に崇高であ

¹² F. Wolf が 1795 年に *Prolegomena ad Homerum* を書いて、Homer の詩は口承によって語り継がれたそれぞれ独立した短い物語詩(バラッド)を後にまとめたものであると述べて以来、バラッド形式による Homer 訳を試みるものが続出した。中でも代表的なものは、1830 年に自ら創設した *Fraser’s Magazine* に発表した W. Maginn の “Homeric Ballads” である(Maginn の死後、1850 年に J. Churchill によってロンドンで、56 年に S. Mackenzie によってニューヨークで、それぞれ編集出版された)。Arnold の攻撃の矢面に立った Newman は、Wolf の立場を踏襲した Homer 訳 *The Iliad of Homer* (London: Walton and Maberly, 1856) を発表した。その他、Homer とバラッドのアナロジーを肯定する立場の者達の例については、Arnold 自身の引用を参考: “On Translating Homer,” *The Complete Prose Works of Matthew Arnold I*, ed. R. H. Super (Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press, 1960) 125-26.

¹³ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold I*: 126.

¹⁴ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold I*: 188.

る。両者の内では “grand style simple”の方がより好ましい。何故なら、それがより「魔力的」であるのに対して、“grand style severe”には「何か知的な要素、詩的才能が欠落しているか、或いは低い程度にしか存在しない場合でも介在しうる思想の遊戯に対する余地を与えるような要素が介在し、従ってより模倣しやすく、それだけ魅力を減退させる」¹⁵ からである。

「高尚さ」(“nobleness”)ということについて付け加えれば、それは単に上に述べたような詩人の性質の高尚さのみでなく、詩の統語法やリズムの高尚さ、詩の登場人物の高尚さ、をも要求するものである。

以上のように “grand style”を定義しながらも、Arnold は基本的にはその定義の困難さをむしろ痛感していたという事実は、後の議論の問題点とも関連して極めて重要である。彼は講義の途中で次のように告白している。

“Nothing has raised more questioning among my critics than these words—*noble, the grand style*. People complain that I do not define these words sufficiently, that I do not tell them enough about them. ‘The grand style, —but what *is* the grand style?’ —they cry; some with an inclination to believe in it, but puzzled; others mockingly and with incredulity. Alas! the grand style is the last matter in the world for verbal definition to deal with adequately. One may say of it as is said of faith: ‘One must feel it in order to know what it is.’ But, as of faith, so too one may say of nobleness, of the grand style: ‘Woe to those who know it not!’”¹⁶

いささか居直った感じの告白ではあるが、実際には彼はこの困難さを乗り越えるために、講義全体を通して精力的に、彼の主張に叶う詩と叶わない詩を引用して比較させるという方法を採用している。例えば、Newman のバラッド形式による Homer 訳(注 12 参照)が統語法の点でもリズムの点でも、A. Pope (*Iliad*, 1715-20; *Odyssey*, 1725-26)や W. Cowper (1791)の不自然で修辭的な訳と比べれば、簡潔で、直接的で、そして自然なものであり、その限りにおいては十分 Homer 的であると評価しながらも、Newman に「高尚さ」が欠けている、即ち、バラッド形式であろうとしたが故に、余りにくだけ過ぎ (“over-familiar”)、自由過ぎた (“too much freedom”)例として、次の引用をする—“Infatuate! O that thou wert lord to some other army, —” 遠征に弱気のみえた Agamemnon に対して Ulysses が咎める場面であるが、Arnold はみずからの理論に対する実践として、¹⁷ 次のような彼自身の訳をそえて比較を求めるのである。

“Ah, unworthy king, some other inglorious army
Should'st thou command, not rule over *us*, whose portion for ever
Zeus hath made it, from youth right up to age, to be winding
Skins of grievous wars, till every soul of us perish.”¹⁸

Iliad, XIV. 84.

これ以上彼の “grand style”のための引用の紹介は避けて、今しばらく、バラッ

¹⁵ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 190.

¹⁶ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 187-88.

¹⁷ See “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 238.

¹⁸ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 125.

ドをめぐる彼の考え方に焦点をしばって整理を続ける必要がある。Arnold は “Preface to First Edition of *Poems*” (1853) で、Achilles、Prometheus、Clytemnestra、Dido ら古典の詩の人物達が、現代のどのような秀れた詩人の詩中の人物よりも興味深いのは何故か、という自らの間に答えて、それは結局「行為がより偉大であり、人物がより高尚であり、状況がより緊張したものであるから、そしてこのことこそ詩における興味の真の基本である」¹⁹ と述べている。彼はこのことに関して、“Preface to Second Edition of *Poems*” (1854) で、決してギリシア・ローマ対現代という時代の区別を問題にしているのではないと弁解している。²⁰ Arnold と「行為」と「現代」の問題は、次の章の主要な論点であるが、とにかく彼にとって重要なことは、行為が「偉大」(“great”) であることである。バラッドとは正に「行為」を物語る形式であるが、しかし、それが偉大であるか否かということは全く問題でない。むしろ殆んどの場合、バラッドが対象とする行為は Arnold 的な意味においては「些細な」(“trifling”) 行為である。そして正にこの「偉大な行為」こそ、上に示した彼の “grand style” の定義における “serious subject” である。“grand style” が “serious subject” を扱うと定義する以上、基本的にバラッドにそぐわないことは自明であろう。彼自身の納得の仕方も極めて単純明快である。

“Let us but observe how a great poet, having to deliver a narrative very weighty and serious, instinctively shrinks from the ballad-form as from a form not commensurate with his subject-matter, a form too narrow and shallow for it, and seeks for a form which has more amplitude and impressiveness.”²¹

最後に、詩人の才能と高尚なる人格の点について触れれば、前者については例えば Arnold は「Newman には詩的な才能がない」²² とかなり独断的である。後者に関する次の引用は、はっきりと Wolf (注 12 参照) を意識したものであり、Homer はあくまでも一人の Homer であって、バラッドの集積ではないという信念、逆に “ballad-style” は決して “grand style” たりえないという彼の信仰に似た気持を、いささか強引に披瀝してみせた感じである。

“The grand source from which conviction, as we read the *Iliad*, keeps pressing in upon us, that there is one poet of the *Iliad*, one Homer—is precisely this nobleness of the poet, this grand manner; we feel that the analogy drawn from other joint compositions does not hold good here, because those works do not bear, like the *Iliad*, the magic stamp of a master; and the moment you have *anything* less than a masterwork, the co-operation or consolidation of several poets becomes possible, for talent is not uncommon; the moment you have much less than a masterwork, they become easy, for mediocrity is everywhere.... I can imagine several poets having contributed to any one of the old English ballads in Percy’s collection. I can imagine several poets, possessing, like Chapman, the Elizabethan vigour and the Elizabethan

¹⁹ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 5.

²⁰ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 17.

²¹ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 207-08.

²² “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 189.

mannerism, united with Chapman to produce his version of the *Iliad*.... And lastly, though Mr. Newman's translation of Homer bears the strong mark of his own idiosyncrasy, yet I can imagine Mr. Newman and a school of adepts trained by him in his art of poetry, jointly producing that work, so that Aristarchus himself should have difficulty in pronouncing which line was the master's, and which a pupil's.... The insurmountable obstacle to believing the *Iliad* a consolidated work of several poets is this: that the work of great masters is unique; and the *Iliad* has a great master's genuine stamp, and that stamp is *the grand style*."²³

(2) Arnold が彼の “grand style”を説明することの困難さについて自ら告白していることは既に触れた通りであるが、それは取りも直さず彼の “grand style”というものが、以上述べてきたような詩の形式・文体に関わる外的側面の問題だけでなく、詩に対して彼が期待するところの内的側面、即ち詩の精神的機能をも包含したものでなければならぬからである。講義の途中で彼は「grand style の存在の有無は精神的にのみ識別しうる」とも告白している。²⁴ こうなってくると、詩を評価する際の絶対的基準としての “grand style”というものの客観性がいささかぐらついてくる訳であるが、むしろその事こそ Arnold 自身の精神的・文学的動揺を暗示するものである。

「高尚さ」というものを不可欠の要素として、彼が“grand style”に期待する詩の精神的機能とは、結局次のような言葉に集約されてくる。

“[The grand style] can form the character, it is edifying. The old English balladist may stir Sir Philip Sidney's heart like a trumpet, and this is much: but Homer, but the few artists in the grand style, can do more; they can refine the raw natural man, they can transmute him”²⁵

彼がどんなに Aristotle の立場に立った Classicism を標榜し、「詩の永遠の目的は行為、人間の行為であり、それ自身の内に固有の興味を所有するものである」²⁶ と主張しても、結局彼は「行為」そのものに留まりえない。次に引用する彼の講義の部分は、結果的にバラッド否定を主張するものであって、むしろ彼が本当に言いたかったことは、詩の「内在的意義」、上の引用文にそって言えば、人格を形成し、徳性を養うこと、にこそ詩の最高の意味がある、ということである。

“Poets receive their distinctive character, not from their subject, but from their application to that subject of the ideas (to quote the *Excursion*)

On God, on Nature, and on human life,
which they have acquired for themselves. In the ballad-poets in general, as in men of a rude and early stage of the world, in whom their humanity is not yet variously and fully developed, the stock of these ideas is scanty, and the ideas themselves not very effective or profound. [For] them the narrative itself is the great matter, not the spirit and significance which underlies the narrative.

²³ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 127-28.

²⁴ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 136.

²⁵ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 138-39.

²⁶ “Preface to First Edition of *Poems*” (1853), *Complete Prose Works of Arnold* I: 3.

Even in later times of richly developed life and thought, poets appear who have what may be called a *balladist's mind*: in whom a fresh and lively curiosity for the outward spectacle of the world is much more strong than their sense of the inward significance of that spectacle.”²⁷

以上のように、バラッドを軸として Arnold の考え方を辿ってくる時、われわれは当然のように彼のもっと基本的な文学的態度に出会うのである。次章で、彼の標榜する Classicism が、その背後に横たわる Arnold 自身の精神的動揺を通してながめた場合、如何に彼の否定する Romanticism と共通する要素を持つものであるかを観察したい。そうすることによって、先に述べた「Arnold は少々意識的にバラッドから逃れ、無視しようとしたのかも知れない」ということを説明できるかもしれない。

III

Wordsworth の “Preface” が Romanticism の宣言であったとすれば、それを非常に意識して書かれたと言われる²⁸ Arnold の、1853 年の詩集に付した “Preface” は、とにかく彼の Classicism の宣言書である。

直接にはこの “Preface” は、1852 年に匿名で発表した詩 “Empedocles on Etna” をこの選集に加えない理由の説明である。「苦悩が行為にはけ口を見い出さないとき、即ち精神の苦痛の状態が継続的に引きのばされ、出来事や希望や抵抗によって解放されないとき、そのような状況のもとでは必然的に何か病的なものが存在し、それを描くことには何か単調なものが存在する。そういう状況が実生活の中に生じた場合、それは苦痛であって、決して悲劇的ではないし、それを詩に表わすこともまた苦痛なことである。」²⁹ それ故に、そのような種類の詩に属する “Empedocles on Etna” をこの選集から排除したという訳である。

行為にはけ口を見い出しえない何か病的なものの存在、悲劇に昇華しえない苦痛なものの存在は、一人彼の作品においてのみでなく、時代の文学的状况一般の病弊であると彼は感じていた。人間の精神状態のアレゴリーが芸術の最高の問題では断固としてありえない、従って *Faust* できえも全体として厳密に判断した場合不完全であると強調する Arnold は、現代の文学の中に範となるものは見い出しえない。「孤立した思想とイメージの駿雨」 (“a shower of isolated thoughts and images”) によってしか満たされる術のない現代人は、古典作家に学ぶことによって初めて、「総体的な感銘」、「一つの精神的感銘」を獲得できるのである。即ちこれこそ、彼のいう「偉大なる行為」のみの与えうる感銘である。

Aristotle 自身は決して行為の大小は問題にしなかった。³⁰ 彼は行為そのもの

²⁷ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold* I: 210.

²⁸ D. G. James, *Matthew Arnold and the Decline of English Romanticism* (Oxford: At the Clarendon Press, 1961) 58-59.

²⁹ “Preface to First Edition of *Poems*” (1853), *Complete Prose Works of Arnold* I: 2-3.

³⁰ *Poetics* の中の中核概念の一つは “ἡρώξις” (=action) であるが、Aristotle は行為が十全に展開されるための、大き過ぎもしないし小さ過ぎもしない、「或る一定の大きさ」 (“a certain magnitude”) が必要であると論じているのであって、決して Arnold のいう、行為は偉大でなければならない、ということではない。See “Aristotle’s *Poetics*,” vi-vii, tr. S. H. Butcher in *Aristotle’s Theory of Poetry*

が模倣の対象として唯一絶対であることを主張したいのである。

“[M]ost important of all is the structure of the incidents. For Tragedy is an imitation, not of men, but of an action and of life, and life consists in action, and its end is a mode of action, not a quality. Now character determines men’s qualities, but it is by their actions that they are happy or the reverse. Dramatic action, therefore, is not with a view to the representation of character: character comes in as subsidiary to the actions. Hence the incidents and the plot are the end of a tragedy; and the end is the chief thing of all.”³¹

Arnold において、行為が偉大であることが強調されるのは意味深いことである。既に彼の“grand style”に関連して、この「偉大である」ということこそ彼の“serious subject”に結びつくものであることは説明したが、“The Study of Poetry”の中で、Aristotle の言う詩が歴史に優越するとはそれが“a higher truth and a higher seriousness”を所有するからであり、従って我々は Aristotle にならって、最高の詩は“truth and seriousness”を持つものでなくてはならないと述べている箇所がある。³² ところが問題は、ここで Aristotle が使った“σπουδαίος”という語が必ずしも“serious”という語に一致しないということ、³³ 逆に言えば、Arnold が“serious”という訳語をあてたことに彼自身にとって極めて重大な意味があったようである。

“It is the σπουδαιότης, the high and excellent seriousness, which Aristotle assigns as one of the grand virtues of poetry. The substance of Chaucer’s poetry, his view of things and his criticism of life, has largeness, freedom, shrewdness, benignity; but it has not this high seriousness. Homer’s criticism of life has it, Dante’s has it, Shakespeare’s has it. *It is this chiefly which gives to our spirits what they can rest upon; and with the increasing demands of our modern ages upon poetry, this virtue of giving us what we can rest upon will be more and more highly exteemed.*”³⁴ (My italics.)

詩が“serious”であるところに精神的な休まりを求めようとする Arnold、しかもそれが時代の要請であると切実に感じる Arnold は、結局は Empedocles の「苦悩」から逃れえない人間であった。何よりの証拠は、1853 年の“Preface”で自ら信奉する Classicism のために犠牲にすることを厭わなかった“Empedocles on Etna”を、わづか二年後にはその抜粋を再版し、1867 年にはその詩の全部を再び出版したという事実である。

ここで改めて、Arnold が否定するバラッドが、「否定」という結論を別にすれば、如何に彼の願望する Classicism と様々の点で似たものであるかを観察してゆきたい。既にわれわれは、詩人はみずから獲得した神・自然・人生に対する

and Fine Arts (New York: Dover, 1951) 23-33.

³¹ “Aristotle’s Poetics,” vi. 9-10, Butcher 25-27.

³² M. Arnold, *Essays in Criticism*, Second Series, ed. S. R. Littlewood (London: Macmillan, 1960) 13.

³³ See “Notes”, *Essays in Criticism*, Second Series, 199; also Butcher 190-91.

³⁴ *Essays in Criticism*, Second Series 19-20.

様々の“ideas”を如何に題材に適用するかによって詩人の特性が生れること、そしてバラッドにはその“ideas”が希薄であるという Arnold の考え方をみてきた。題材に関わってその上位にあるものとしての“ideas”とは一体どういうものを指しているのであろうか。Wordsworth 論の中に、詩を定義した次の有名な言葉がある。

“Poetry is at bottom a criticism of life; ... the greatness of a poet lies in his powerful and beautiful application of ideas to life, —to the question: How to live?”³⁵

或いはまた、A. H. Clough あての手紙の中で次のように述べている箇所がある。

“[Keats and Browning] will not be patient neither understand that they must begin with an Idea of the world in order not to be prevailed over by the world’s multitudinousness: or if they cannot get that, at least with isolated ideas: and all other things shall (perhaps) be added unto them.”³⁶

A. H. Warren, Jr はこの“Idea of the world”を “moral and social, or quite broadly, cultural ideals”という言葉に置き換えているが、³⁷ Arnold と Plato の緊密な関係を考えるとき、³⁸ それが Plato 的な意味におけるアイデアを暗示していることは十分考えられる。即ち、不完全で混沌とした経験界 (Clough あての手紙の中の言葉で言えば “the world’s multitudinousness”) に対して規範となるべき永遠の原型・形相(Form)である。それこそ詩が題材に対して持つべき「形式」であり、Arnold が困惑・混乱・不安の中で古典に指針を求め、「偉大なる行為」に憧れて、“grand style”という詩の形式を主張したことは既にみてきた通りである。Warren が「詩の形式に対する Arnold の主張は、彼自身の人生における形式の必要性の反映である」と述べているのは、³⁹ けだし当を得た表現である。

しからば、このような Arnold の詩と形式に対する考え方が、果して本質的にバラッドと対立するものであろうか。バラッドは、人間の様々な経験・行為を最も簡潔化した形で物語ったものである。そこには、愛・憎しみ・生・死等、人間の原初的な感情に根ざした形での行為—prototype としての行為—以外の何ものもない。それがバラッドの全てであり、逆に言えばバラッドという詩の形式そのものである。この問題に関連して、W. P. Ker の *Form and Style in Poetry* は極めて重要な支持を与えてくれるものである。彼の「詩は形式そのものである」という考え方は、バラッドから発生したものであるが、バラッドを「一つの詩の形式」—“a Platonic Idea, a Ballad in itself, unchangeable and one, of which the phenomenal multitude of ballads are “partakers” in the Platonic sense of

³⁵ *Essays in Criticism*, Second Series 85.

³⁶ H. F. Lowry, ed. *The Letters of Matthew Arnold to Arthur Hugh Clough* (London: Oxford UP, 1932) 97.

³⁷ A. H. Warren, Jr., *English Poetic Theory 1825-1865* (Princeton UP, 1950) 158.

³⁸ 拙稿「Matthew Arnold の文学定義と‘Hellenism’」 *Cairn* 5 (九州大学大学院英文学研究室, 1964)参照。

³⁹ Warren 157.

the term”⁴⁰—ととらえる彼は、一般的に、独立した存在としての詩の形式について、更には上に触れた Arnold の詩の定義にも言及して次のように述べている。

“In the lectures of last term [on Ballads] I spoke of the form of the ballad as something distinct, vital and active—an idea working in the minds of many different nations independently, towards the same kind of poetical result. If this be a sound view, it will prove the value of poetical form as something distinct from the individual genius or caprice of the poetical artist....

Poetry in one sense is all form, though there is danger in that statement. One must note that the same thing may be said of the fine arts. What they convey to the mind is not properly the artistic treatment of the subject, but the subject so translated into form that the mind does not want anything else.

Arnold’s definition of poetry as “criticism of life” has some meaning. The weakness of the phrase is that it makes a separation between the critic and the subject criticised. To say that poetry is form does not mean that poetry is meaningless or wanting in substance, and the same is true of the fine arts.”⁴¹

これ以上今、詩(とりわけバラッド)と形式の問題に立ち入る余裕はなく、とにかく Arnold のいうバラッドにおける“ideas”の希薄性にもかかわらず、バラッドは“ideas”そのもので成り立つ詩の形式であるということを指摘するのみである。

上の問題を別の角度から考えてみれば、Arnold の求める “Idea of the world” の普遍性とは、バラッドにおいて行為がクライマックスに集約されて生み出される「ドラマの瞬間」 (“the moment of drama”)の持つ普遍性に通じる。第 1 章で紹介した Gray のいう「バラッドは第 5 章からはじまる」という意味である。Leach はバラッドの歴史的発達を次のように説明している。

“This tendency to concentrate on climactic action is a contribution of the folk to ballad style and form, for it develops in a given ballad as that ballad comes down in time from folk singer to folk singer.

Ballads are things of growth; in their earliest forms many, but certainly not all, of the ballads probably told stories as detailed as any conventional narrative; but as they are re-created by the folk, the slow elements and the undramatic elements are dropped and only the hard core of tension remains—the moment of drama.”⁴²

即ち、この瞬間には一人の人間 (“a man”)が普遍的な人間 (“man”)になり、全てを破壊するか、逆に全てを暴露する人生における一瞬を迎えるのである。その時、その瞬間までの全ての過程は無に帰する。逆に言えば、このドラマの瞬間にそれに関わる全てのものが—時間的経過も、事件の動機・状況も、人物の心理・性格・感情も—煮つまり、凝縮した形で存在するのである。一般的にバラッドは行為を物語るという訳であるが、このドラマの瞬間においては、このような意味においては、行為と行為をもたらしめたものは一体化していると言える。Wordsworth が“Preface”で、

⁴⁰ W. P. Ker, *Form and Style in Poetry* (London: Macmillan, 1966) 42.

⁴¹ Ker 95, 143.

⁴² Leach 3.

“It is proper that I should mention one other circumstance which distinguishes these Poems from the popular poetry of the day; it is this, that *the feeling therein developed* gives importance to the action and situation, and not the action and situation to the feeling.”⁴³ (My italics.)

と述べるとき、それは決してバラッドの基本的性格と矛盾し、また “emotional, subjective element” が “narrative element” に先行するというのではなく、「そこに展開された感情」とは正にこの凝縮した形での行為と一体化した感情を意味していると解すべきである。

別のところで Wordsworth はしばしば、「基本的感情」 (“elementary feelings”) という言葉使いをしているが、同じ “elementary feelings” という言葉を使って Arnold が行為の普遍性を説明している箇所がある。

“The poet, then, has in the first place to select an excellent action; and what actions are the most excellent? Those, certainly, which most powerfully appeal to the great primary human affections: to those elementary feelings which subsist permanently in the race, and which are independent of time. These feelings are permanent and the same.... To the elementary part of our nature, to our passions, that which is great and passionate is eternally interesting; and interesting solely in proportion to its greatness and to its passion.”⁴⁴

Arnold の意識にとっては欠かせない「偉大さ」ということを抜きにすれば、ここで言われている「行為」と「感情」と「普遍性」は上に述べてきたバラッドの特性、或いは Wordsworth の考え方と何ら変るところはない。Warren はこの箇所を指して、「Wordsworth 的言葉使いで表現された Aristotle の概念」 (“Aristotle’s universals in Wordsworthian phrase”) と言っているが、⁴⁵ けだし Arnold の体質を言いえて妙である。

IV

Wordsworth の “Preface” が、時代におもねる文学的風潮に対する批判を込めて書かれた一面も無視できない。時代に左右されない普遍性の行きつくところが、彼にとってはバラッドの持つ「簡潔さ」 (“Simplicity”) であった。そしてそこから彼の “lyrical poetry” は生れた。同じように Arnold の “Preface” は、彼自身の時代に対する不安感を基底にして、Homer の持つ「簡潔さ」と「高尚さ」に行きついた。バラッドの持つ文学性に初めて本格的に注目した Addison が、*Chevy Chase* の中に見出したものも、Homer や Virgil に等しく通じる「簡潔さ」であり、「高尚さ」であった。Addison と Wordsworth からは Romanticism が生まれ、Arnold からは Classicism が生まれた。バラッドをめぐって、そのとらえ方は三者三様であったとしても、大流としての Romanticism と Classicism は、バラッドの文学性という一点から観れば、決して言葉ほどには両者の間に差異はない。そのことは正にバラッドという詩の形式の持つ可能性の大きさを暗示

⁴³ Knight 281-82.

⁴⁴ “Preface to First Edition of *Poems*” (1853), *Complete Prose Works of Arnold* I: 4.

⁴⁵ Warren 163.

するものと言えよう。

“On Translating Homer” に対する Newman の反論に答えた“Last Words”の中で Arnold は、一箇所バラッドから引用しているところがある。しかも彼のいう“grand style”にバラッドがなりうる例としてである。

“O lang, lang may their ladies sit,
Wi’ their fans into their hand,
Or ere they see Sir Patrick Spence
Come sailing to the land.
O lang, lang may the ladies stand,
Wi’ their gold combs in their hair,
Waiting for their ain dear lords,
For they’ll see them nae mair.”⁴⁶

最も代表的なバラッドの一つである *Sir Patrick Spens* 全 44 行の内で終り近くのこの箇所 8 行を Arnold が引用していることは極めて印象深い。彼はバラッドが物語詩には不相当であること、しかし叙情詩となれば問題は別であるとして、次のように述べるのである。

“When there comes in poetry what I may call the *lyrical cry*, this transfigures everything, makes everything grand; the simplest form may be here even an advantage, because the flame of the emotion glows through and through it more easily.”⁴⁷

Arnold の詩の引用の場面は、既に前節までで *Sir Patrick Spence* と彼の乗組員たちの航海と溺死の経緯が語られ、それに続いて、故郷で女たちが彼らの帰りを待っている様子を語った部分である。この 2 節だけを切り出してみれば、或いは彼のいう「感情の炎」(“the flame of the emotion”)の高まりを感じることも可能かも知れない。しかしそれまでの 8 節と切り離して読むことは不可能である。即ち、王の気まぐれから冬の海に乗り出すはめになった *Sir Patrick Spence* が、王の命令を受けて、危険な運命を呪いながらも急転直下乗組員達に船出をうながす、嵐が来たそうだと尻込みする船乗り達、そしてまた次の瞬間には荒れ狂う海と戦い死んでいってしまう場面、8 節 32 行の内に語られるこの悲劇は、むしろバラッド個有の、感情や心理的屈折を最高に抑制した方法で語られてゆくのである。その物語りの連続の内に上の 2 節を読むとき、われわれは Arnold の受け止め方に反して、同じように抑制した形で帰りを待つ女たちのことが語られているという風に受け止める。

Arnold の読み方が正しかったかどうかという問題は別にして、バラッドに叙情性が付帯することは、本来バラッドはうたわれるものであったことからしても、まぬがれない事実である。Ker はバラッドの定義に関して次のように述べている。

⁴⁶ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold I*: 209-10. Percy の *Reliques* からの引用で、スペリングを多少 Arnold が現代風に変えている部分があるが、ここではそのまま Arnold の引用を採用した。Cf. Child 58A.

⁴⁷ “On Translating Homer,” *Complete Prose Works of Arnold I*: 209.

“ [A ballad] is not a narrative poem only; it is a narrative poem lyrical in form, or a lyrical poem with a narrative body in it. And it is a lyrical narrative, not of the ambitious kind, like Pindar, but simple, and adapted for simple audiences for oral tradition, from one generation to another.”⁴⁸

しかしこの叙情性とは、決して所謂 Arnold が言う意味での個々の具体的な場面で現れる「感情の炎」ではなく、むしろそういう感情を一際殺した語り方の全体が生み出す叙情的効果—バラッドの技法的効果である。この意味で、バラッドの物語性と叙情性とは決して矛盾したり対立するものではなく、むしろこの点にも上に述べたバラッドという詩の形式の持つ可能性の大きさがあると言えよう。Arnold はそういうバラッドの可能性の狭間にあって、バラッドを否定する中に結果的に見事にみずからの文学的体質を露呈していったと言えよう。

[本論は、『英語と英米文学』(山口大学) 8(1973)掲載の初出論文に加筆訂正を加えたものである。]

⁴⁸ Ker 3. See also Leach 5, 10; Wordsworth’s “Preface to the Edition of 1815”, Knight 314.